



渋滞はいっ解消するの？ 平和町の立体交差化の工事について

先月、静岡新聞の「ひろば」の欄に読者から現在工事中の平和町地先の立体交差化の工事に絡んで、バイパス計画の経緯とその遅れ、今後の方針について怒りにも似た投書が寄せられました。

この投書に対し国土交通省国道事務所からの返事として交差点改良の工事は平成20年には完成、しかし静岡バイパスの全線4車線化となればまだ10年ほどかかるとの回答がありました。

恐らく投書人はこれまでのバイパス事業の遅れに大いなる怒りを抱いての行為でしょうが、実は本当に「頭」にきているのは国道事務所側ではないでしょうか、なんとと言っても平和町地先の二重の手間は他ならぬ地区住民の我儘が起因しているからであります。

当時、建設省は今日の交通渋滞を予測して県道との立体交差を提案してまいりましたが、地元住民は度重なる説明会において闇雲に立体交差化に反対、遂には当局も説得する術も失い、事業の一層の遅滞を心配し、やむなく住民の主張に軌道修正した経緯があります。

将に平和町地先の慢性的渋滞の原因は偏に専門家の意見に耳を貸さなかった地区住民の我儘が招来させたものと云わざるを得ません。以上が静岡バイパスに係る事業の経緯であります。

処で、敢えて申し上げますが、このバイパス工事は昭和43年に都市計画決定して、なお今日

完成を見ない最大の要因は叱責されても仕方がないほどの「本市の伝統的怠慢」な行政姿勢にあると云わざるを得ません。

私が市長になって間もなく、千代田地先の反対住民と上土公民館で初めて対峙した折、住民側から『市長と顔を合わせたのは今日が初めて』の言葉があり、それゆえ私の仕事は行政に対する住民の不信を払拭するところから始まったのであります。

その結果、最終的には強制収用法という歓迎すべからざる手段を斃すところとなったのでした。

勿論、行政側の提案を唯々諾々と受け入れることには問題がありますが、今、市民の偽らざる言葉は、「第二東名より先に」でありましょう。平成8年、二車線ながら供用開始したこのバイパスもその後、記述したように捗々しいほどの進捗を見ることなく早くも10年の歳月を経過する所となったのであります。市政の奮起に期待します。

蝟螂の斧 — わが人生

中国語でカマキリを表す文字が「蝟螂」であり、「斧」は鎌に似た蝟螂の前脚を云います。

あの小枝にも似た細身のカマキリが敵を真正面に見据えて大きく戦いの姿勢を示している姿を昔から「蝟螂の斧」と表現してきました。

それは自らの微力さを省みず、遙かに強力な敵に挑戦する姿でもあります。

実は来春の統一選挙をもって私が政治の世界に歩を進めて40年（昭和42年、25歳で市議会初登壇）になりますが、この間の私の政治姿勢は将にこの「蝟螂の斧」そのものでした。

何時の日にか事の顛末を赤裸々にお話しする機会もあるうかとは思いますが、「市長職」を辞任するに到った経緯もまた「蝟螂の斧」の災いであり、更に前回の市長選への出馬も向こう見ずともいえるこの精神の典型と言わざるを得ません。

この40年間の私の歴史は、自身では充分に斟酌し、正しいものと決断した政策や考え方については、声高に主張、その結果、たとえ孤高の立場に置かれようともいたずらな妥協を嫌い、自らの姿勢を堅持してまいりました。その舞台がたとえ市議会であれ、県議会であれ、そしてある種の権力を掌中する市長職にあっても同様でありました。

そして、そのエネルギーは即ち生まれ持った「反骨の魂」が原点と云えるでしょう。

私が何時、どのようなようにしてこの「頑固」とも云われる性格が形成されたかは定かではありませんが、時に自分自身を鏡に見ながら、もう少し柔軟な姿勢や思考であればと思う事も屡々でした。

幸い後援会の温かなご理解とご支援あって、無事、今日まで無骨ながらも地方政界の渦中に生きて来られました。それゆえに今、私に課せられた仕事として県と市の確かな「羅針盤」の役割を認識し、もってこの天命としての職務を全うして参りたいと存じます。

文責 天野進吾

大岩と臨濟寺

しばしば「お・・・お」と意味不明な念仏を口ずさみながら何人も修行僧たちが托鉢しながら町内を廻ってきます。ご存知でしょうか、この方々は賤機山の東麓にある臨濟寺の(*)叢林僧であります。

臨濟寺は臨濟宗妙心寺派の禪寺であります。一方、修業の専門道場として全国各地より多くの若い僧が出入りしております。

今川家の国主であった氏輝が逝去、後を継いだ義元は臨濟寺を建立しました。その住持職として義元にとっては師と仰ぐ太原雪斎が就き、同時に雪斎は兵法にも詳しいことから、今川家の執権職としても活躍しました。

今川義元が駿府、遠州、三河の太守として権勢を振るうことのできたのも軍師としての雪斎がいたればこそと云われております。この雪斎が今川の人質となった若き日の家康(竹千代)の学問を指導したことはご案内の通りです。

さて地名ですがこの周辺を「大岩」と呼んでおりますが、その由来は賤機山の山麓の地下は大きな岩盤で守られていることからその名が付いたと言われております。

嘗ては静岡大学がここに存立しておりましたが、敷地の狭隘さから

大谷地区に移転し、今は城北公園として市民の憩いの場になっております。

また近所に富春院があります。その入り口に「尚志」の碑がありますが、これは明治初期の洋学者であり、駿河学問所の教授・中村正直を顕彰するものです。号を敬字と称し、英国留学の後、16代将軍に当たる徳川家達を追っ

一寸一言

私の雑記帳から

大道芸の舞台裏

今年11月2日から第15回大道芸ワールドカップが開催されます。お陰様で本市の代表的イベントとして定着、例年多くの観光客を迎え、その経済波及も決して小さなものではありません。

処で、平成2年、この行事を企画した際、最初に突き当たった難題は海外のパフォーマーの招致でした。当時、「大道芸」の世界はその呼称も組織もプロダクションも全くありませんでした。日本において大道芸は、言うなれば道交法違反で警察に追いまくられる『河原乞食』そのままに、全く認知されていない文化でした。ですからパフォーマー、就中、外国の芸人を招聘する手段や方法はなく、担当する市職員の戸惑いは半端ではありませんでした。勿論、この企画の最大の

てこの地に移住、駿府学問所の教授として活躍、この地での訳書「西国立志偏」「自由之理」は当時、福澤諭吉の「学問のススメ」と並ぶベストセラーとなったのであります。

(*「叢林」とは禪寺のこと、即ち禪宗僧。

ネットがここにあることは当初より承知し、思案の種ではありましたが、ある時、私の脳裡に極めて頓狂な閃きがありました。即ち世界中に「アンテナ」をもつ機関を仲間にする事、考え抜いて着眼したところがNHKでした。ご案内のようにNHKは世界中に特派員をもつ信頼できる組織であります、その特派員に世界各地で演技するパフォーマーをビデオで映しこれを日本に送ってもらい、我々はそのビデオでその年の招待選手を決めることにしたのであります。この着想によって始めて大道芸が開催できたのでした。

今ではこのワールドカップは大道芸人たちの憧れの舞台となり世界各地から自薦、他薦のビデオが送られてくるまでになりました。



彩時記

秋空の下でおにぎりを

晴れた秋空の下、行楽地や運動会の会場で“おにぎり”を食べる方も多いことでしょう。“おにぎり”は既に弥生時代に存在していたようです。平安時代には兵士の食事として用いられました。形が鳥の卵に似ている事から“鳥の子”とも呼ばれました。

“おにぎり”という言葉は、もち米をむした強飯(こわい)をにぎった“にぎりめし”が原型です。江戸時代に身分の高い女性たちが、ていねいでやさしい言葉、女房言葉として“おにぎり”を“おむすび”と言い換えるようになりました。

現代は、コンビニでいつでもユニークな具が入った“おにぎり”を買うことができます。けれども、梅干やおかかといったベーシックな具入りの、手づくり“おにぎり”の懐かしいおいしさは、どんな高級食材にも勝るものかもしれません。

歴史講座のお知らせ

町内会の集會、サークル活動などに天野進吾を呼んでみませんか。嬉しいことに最近、グループや町内会などで『天野進吾』の歴史講座の要望が増えて参りました。このSHINGO SCOPEの郷土史が好評ですのでその現れかもしれません。どうぞ、お気軽にお声掛けください。